

2023 年度 公開講座

「3R だけじゃない!? 環境と経済を両立させるサーキュラーエコノミー（循環経済）  
～持続可能な社会につながる新しいルール（規格）づくり～」実施報告

(公社) 日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会  
標準化委員会・環境委員会

2023 年 7 月 3 日、東京大学大学院工学系研究科 人工物工学研究センターの梅田 靖 教授を講師に実施されたオンライン公開講座には、NACS 会員・非会員合わせて 160 名の申込がありました。

サーキュラーエコノミー（以下 CE）のことばを聞いたことはあるものの実はよくわからない、という参加者に向け、CE とは？ その実現のために社会や企業に求められることとは？ そして消費者・使用者ができることについて等を実例と併せ、お話しいたしました。

まず最初に、サステナビリティを企業活動の中心に取り込まないと企業はやっていけなくなる、カーボン・ニュートラル（以下 CN）、CE がその前提条件であるとの時代認識が示されました。

次に欧州における CE に対する基本姿勢について説明がありました。脱大量生産・大量販売ビジネス社会を実現させ、プラスチック・リサイクルに代表される資源循環を社会に定着させること、そしてそれによる雇用の確保と EU の競争力の強化、電池規則案<sup>※1</sup>やエコデザイン規則案<sup>※2</sup>といった規制や標準化を用いて、世界のルールメイキングを先行しようという意図があるとのことでした。

※1 EU 域内で販売される全てのバッテリーに対するライフサイクル全体に及ぶ包括的な規制（2020 年 12 月）。

※2 全ての物理的な商品（食品・医療品などは除く）に対して、製品ごとのエコデザイン要件を設定する枠組み。

初めて未使用繊維製品の廃棄禁止を明文化（2022 年 3 月）。

一方日本では、埋立処分場不足の解決に始まった従来の 3R（Reduce・Reuse・Recycle）・循環型社会の次のステップにとどまらず「成長志向型の資源自律経済戦略」（経済産業省 23 年 3 月発表）において、CE と CN を一体的に進め、サステナビリティと経済成長、Well-Being を同時実現していくという方向性が示された、との説明がありました。

CE という目指すべき将来像（Vision）の実現のためには、VMS（Vison-Meso-Seeds）モデルを用いて整理することを提案されました。具体的には、目指すべき将来像を Seeds(技術開発)によって一気に実現することは難しい。その間にある Meso 領域（社会）をイメージすることで、製造業をライフサイクル産業化する（「循環プロバイダー」によるマネジメント、ライフサイクル設計、新たなビジネスモデル、デジタル化）等が重要、とのことでした。

そして CE とは、従来の廃棄物処理、3R と同列ではなく、豊かさ/経済/企業競争力を追求する人間活動を、プラネタリー・バウンダリー（人々が地球で安全に活動できる範囲を科学的に定義し、その限界点を表した概念）に代表される地球の有限性の範囲内に収めるアブソリュート・デカップリング（経済水準が向上しつつも環境負荷が低下している状態）の実現を目指す、とまとめられました。

CE では、製品のライフサイクル全体を視ての資源消費の最小化と「もの」の提供から「価値」の提供への転

換が行われる。Loop、レンズ付きフィルム、ペットボトルの水平リサイクル、エンジンやタイヤの製品サービス等が紹介され、ここではユーザーの使用情報が設計段階、再生産で利用され、生産情報がメンテナンスで利用されるようになり、またメーカーとユーザーとの関係が双方向的なものになるという指摘もありました。

消費者に対しては、まだ考えがまとまっていないとしながらも、Meso 領域（産業、農業、生活、制度、経済等の社会そのもの）が鍵となるので、ここをしっかりと見据えて、サステナブルな方向へ価値観を変化させ、提供される情報を使いこなし、循環側との連携や相互理解を進めることなどが期待を込めて提案されました。

質疑応答では、身近な例として傘や洋服などのシェアリングビジネスや、リース（PaaS）、サブスク、耐久財における長寿命化、リマニュファクチャリング、部品のリユース等の紹介がありました。そして、修理の権利及びそこから生じるであろう課題について意見が交換されました。

## アンケート結果（締め切り：7月11日 有効回答数 72件）

Q1.講演全体については、5段階のうち5または4が65件90%に達しました。内容に関しては「難しいテーマを分かりやすく説明いただいた」「特に具体的事例が理解しやすかった」との声が多く挙がっていました。（回答数 56件）

また、Q3. CE への理解については、5段階のうち5または4の62件86%が、CE への理解が進んだと回答しています。内容に関しては「CE は大量生産・大量販売からの脱却、地球の有限性の範囲内で収めようとする取組等であること」「具体的な CE のビジネス例などについて理解が進んだ」「モノ作りを含む価値提供のやり方を変えようとする試み」との声が挙がっていました。（回答数 47件）

CE の実現に向けて、消費者・生活者はライフスタイルをどう変えていったらよいか、に関しては、「ライフサイクル設計に取り組んでいる企業の製品やサービスを利用してみたい」「持たないで共有する価値を広げたい」「メゾレベル（社会のありよう）の議論を企業と行うことが必要である」など、参加者それぞれの発想で、取組のヒント、アイデアが多く挙げられました。（回答数 50件）

CE の規格（標準化）については、欧州の戦略に負けないか、社会システムになりうるか、等の懸念点が挙げられました。（回答数 41件）

その他、CE についてさらなる講座を期待する声、環境と経済の両立への関心など、前向きな感想が多く寄せられました。（回答数 23件）

（環境委員会 大石美奈子、錫木圭一郎、根村玲子）